「若い男女における結婚、出産についての意識調査」の解析
―「子どもが欲しい」という回答をもたらす因子についての検討 ―

研究分担者　　吉川　弘明　（金沢大学保健管理センター）
研究協力者　　足立　由美　（金沢大学保健管理センター）

平成25年度に実施した「若い男女における結婚、出産についての意識調査」について、「子どもが欲しい」もしくは「子どもが欲しくない」という選択式の回答から解析を行った結果、結婚に対する希望と強い関連があることがわかった。また、自分の育った家庭環境への肯定感、食卓が明るく心地よかったという記憶と、将来子どもが欲しいと意識することは関連があることがわかった。部活動に参加することと、子どもが欲しいこととも関連があった。一方、飲酒、喫煙、日常的な運動の有無は関連がなかった。高校生と大学生を分けて解析したが、これらの結果は同じであった。現在の健康状態の程度と子どもが欲しいか否かは関連はないものの、健康への関心が高いものが子どもが欲しいと思うという関連が大学生において見られた。今回の調査から高校や大学における健康教育、食育、コミュニケーション教育を考える上で重要な示唆が得られた。

A. 研究目的

日本の将来を担う若い世代における意識調査として、当班では平成25年度に『若い男女における結婚、出産についての意識調査』に関するアンケート（以下「若い男女に関するアンケート」）（資料1）を実施した。この調査は、高校生と大学生における生活の実態と現状の認識、食事・栄養、結婚・出産に関するアンケート調査である。この研究では、アンケートの集計データを用い、将来、結婚と子どもを持つことを方向づける因子を解析することが目的である。

B. 研究方法

平成 25 年度に当班構成メンバーの所属する大学、もしくは関係する高校と大学において、当班で作成した「若い男女に関するアンケート」を実施した。アンケートは印刷された用紙に自己記入する形式を採用し、各大学・高校ごとに実施・回収した後、岐阜大学保健管理センターでスプレッドシートに入力した。アンケートは個人が特定できない無記名式であり、アンケートに答えるか否かは個人の自由とした。

統計解析は、主な調査項目に関して1変量の解析を行って、データの分布を見た後、「子どもが欲しい」、「子どもは欲しくない」の 2 者択一の質問（**資料 1**：質問 4-4）によりパーティション解析（ディシジョンツリー、決定木）による探索的検討を行った。統計解析ソフトウェアとして JMP ver.11 (SAS Institute, Japan)を使用した。

（倫理面への配慮）

調査に際しては岐阜大学倫理審査委員会と金沢大学医学倫理審査委員会の審査・承認を経て実施した。なお、データには名前等が特定できる個人情報は含まれていない。また、協力を希望しない学生に対して、授業等で不利益が生じないように配慮した。

C. 研究結果

データ総数は 3,055 件であった。この中で性別が不明な39件を除外し、本人の年齢が12歳未満、本人が生まれた時の父親もしくは母親の年齢が16歳未満、65歳以上、もしくは無回答の例を除外しし、合計 2,116 件について解析を行った（高校生 1156 人；男性 724 人、女性 432 人、大学生 960 人；男性 232 人、女性 728 人）。なお、解析は高校生と大学生を分けて行った。また、解析を単純化するため、質問の回答によって、さらに質問を重ねる入れ子型の調査項目は除外した。女性に限って回答を求めた質問項目 5 以下については、除外した。また、特に高校生において学部別の分類が当てはまらなかったため、全体の解析からこのカテゴリーは除外した。

以下、質問 4-4「あなたは、将来、子どもが欲しいと思っていますか？」に関する回答「1. 子どもは欲しくない」「2. 子どもが欲しい」に注目し、回答結果を解析した。

高校生と大学生別に、目的変数を 1. 子どもが欲しい、2. 子どもは欲しくない、のカテゴリーとして、パーティション解析を行った（図 1）。高校生は「子どもが欲しい」、「子どもが欲しくない」は「いずれ結婚するつもり」とそれ以外の結婚意識の影響を受ける。さらに、過去6ヶ月に「歩く」程度の運動を1時間以上していたことも「子どもが欲しい」に関連することが分かった。一方、「結婚するつもりはない」というという回答は、「子どもは欲しくない」とという回答と関連していることがわかった。高校生に関して、「子どもが欲しい」と「いずれ結婚するつもり」との回答にはカイ 2 乗検定の結果、相関があることがわかった（$p<0.0001$）（表1）。

大学生においても「子どもが欲しい」か「子どもが欲しくない」かのカテゴリーによるパーテョション解析を行ったところ、同様に「結婚するつもり」とそれ以外「一生結婚するつもりはない、考えたこともない」で分枝することがわかった（図 2）。子どもが欲しいと答えた群はさらに仕事と育児の両立を望んでいることがわかる。大学生においても、「子どもが欲しい」と「結婚するつもり」にはカイ 2 乗検定で関係が見られた（$p<0.0001$）（表 2）。

次にいくつかの質問項目に関して、「子どもがほしい」との関連を検討した。質問 4-12「自分の育ったような家庭を自分も築きたいか」に関し、回答「1. 思う、2. 思わない、3. わからない」で子どもが欲しい、欲しくないとの関連を名義ロジスティック解析をしたところ、自分の育ったような家庭を築きたいことと、子どもが欲しいとは関連があることがわかった（高校生；$p<0.0001$, 大学生；$p<0.0001$）。

また、質問 3-6「自分の家は、食事が楽しく心地良かった」に関して、子どもが欲しいとの関連をみたところ、食事が楽しかったと答えることと、子どもが欲しいと回答することには関連があることがわかった（高校生; $p<0.0001$、大学生；$p<0.005$）。

部活動に関しては、質問 2-3 で「していた」、「していない」の 2 択で質問をしているが、名義ロジスティック解析の結果、高校生、大学生ともに、部活動をしていたことと子供が欲しいこととは関連があった（高校生：$p<0.0002$、大学生；$p<0.0001$）。しかし、飲酒の有無、喫煙の有無と子どもが欲しいこととは関連はなかった。

質問 2-13 の「自分の健康状態」に関しては、高校生も大学生も「子どもが欲しい」という意識との関連はなかった。一方、質問 2-14「自分の健康に関する関心」では、高校生では関係はなかったものの大学生において、自分の健康に関心があることと、子どもが欲しいと思うことの関連があった（$p<0.0005$）。

D. 考察

平成 25 年度実施「若い男女における結婚、出産についての意識調査」を「子どもが欲しい」、「欲しくない」という回答に注目して解析をした結果、結婚に関して「将来、結婚するつもりである」という回答と高い関連があった。また、「自分が育ったよ

うな家庭を築きたい」、「自分の家は、食事が楽しく心地良かった」という育った家庭環境が良好であった場合に「子どもがほしい」と思わせることがわかった。これらの関連は、高校生と大学生で同様であった。育った環境が将来の家庭や子どもに対する希望を左右するということは、家庭という最小単位のコミュニティーのあり方を考える上で、重要な示唆を、我々に与えてくれる。部活動に関しては、高校生も大学生も部活動をすることと子どもを欲しいと思うことに関連があった。他人との関わり合いの中で、自己を知ることは、基本的に重要なことであることをうかがわせる。すなわち、我々の感じる自己の概念は他人との関係性の中で生まれるものである。そのことに気づき、また他人との関係性の中に生きることに喜びを感じることは、健全なコミュニティー、さらには機能的な社会の形成のために不可欠なものである。

健康に関する因子の中では、喫煙、飲酒に関しては、子どもが欲しいことと関係がなく、現在の健康状態も関連はなかった。今回の調査対象がヒトとしての生活歴のなかで、もっとも体力が充実した高校生、大学生であったために、体調の不調を意識することがないためと考えられる。しかし、大学生のみの結果ではあるが、健康への関心と子どもが欲しいとの間に関連があることがわかった。この世代において健康への意識を持つということは、中高年の場合とは違い、より良く生きたい、もっと自分の可能性を広げていきたいという前向きな姿勢のあらわれと思われ、自分の未来を明るいものと考えている可能性がある。そのような希望を持った大学生が、実際に自分の育った家庭の良いイメージを持っていた場合、明るい家庭を持ちたい、子どもがほしい、母親や父親の役割を自分の両親と同じようにしてみたいと思うのは自然なことと思われる。また、大学生においては「子どもが欲しい」ことと仕事と育児の両立を望むことは関連があり、社会政策的にもこのような希望をかなえるような仕組み作りが必要であろう。今回の解析の結果は、ある程度、予想できるものであるが、実際のアンケート調査の結果として確認できた意義は大きい。今後、高校や大学における健康教育、食育、コミュニケーション教育のあり方を考える上で、重要なデータが得られたものと考えられる。

E. 結論

「子どもが欲しい」という意識は、「結婚するつもり」という希望と強く関連づいていることがわかった。また、自分が育った家庭環境への肯定感、楽しい食卓、部活動の経験は、「子どもが欲しい」という意識に繋がるものであることがわかった。さらに、大学生においては仕事と育児の両立を望む群が「子どもが欲しい」と考えていることから、社会政策として仕事と育児の両立が可能な環境を提供することが重要になってくると考えられる。

F. 研究発表

1. 論文発表

1) 吉川弘明、足立由美：ライフプランを含む教育用パンフレットに対する評価と大学生への健康教育－大学生の健康教育へのニーズと必要性－　金沢大学保健管理センター年報･紀要 No.7(通巻 41) 68 - 75, 2015.

2. 学会発表

1) 吉川弘明、足立由美、山本眞由美、西尾彰泰、佐渡忠洋、堀田亮：教育用パンフレット「知っていますか？男性のからだのこと、女性のからだのこと」に対する大学生の意識調査　第 56 回日本教育心理学会総会　於神戸、2014.11.7～9

2) 西尾彰泰、堀田亮、佐渡忠洋、吉川弘明、足立由美、松浦賢長、猪飼周平、高田昌代、林芙美、加納亜紀、磯村有希、山本眞由美　大学生における結婚、出産についての意識調査－大学の健康教育で何を教えるべき

か？－ 第 52 回全国大学保健管理研究集会 東京、2014.9.3～4

3) 西尾彰泰、堀田亮、佐渡忠洋、吉川弘明、足立由美、松浦賢長、林芙美、山本眞由美 高校生を対象とした結婚、出産についての意識調査－保健の授業で何を教えるべきか？－ 第 57 回東海学校保健学会 岐阜、2014.9.6

4) 林芙美、西尾彰泰、堀田亮、佐渡忠洋、吉川弘明、足立由美、松浦賢長、山本眞由美：高校生・大学生における将来の結婚や子どもを持つことに対する意識と現在の食知識、食習慣、食に関する主観的 QOL の関連について。第 61 回 一般社団法人 日本学校保健学会 学術大会、金沢、2014.11.15～16.

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

H. 添付資料

1. 若い男女における結婚、出産についての意識調査

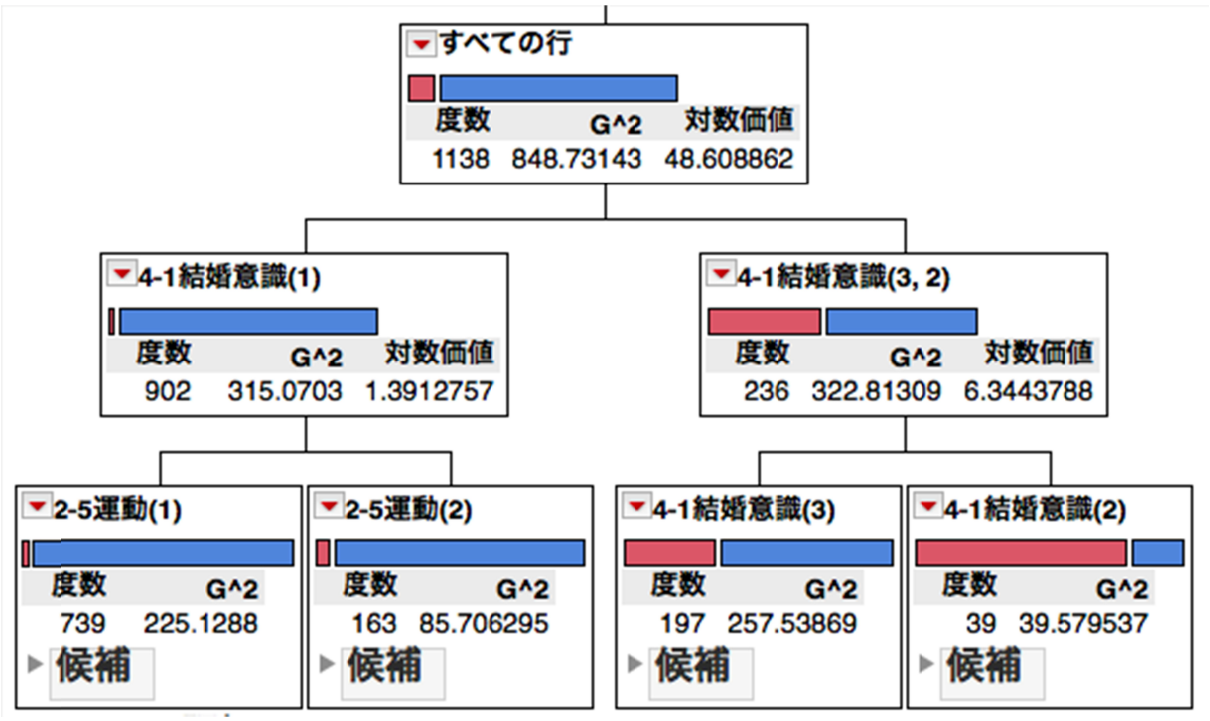

図１　高校生の 1.子どもが欲しい、2.子どもは欲しくない、のカテゴリーで分枝させたパーティション解析

子どもが欲しいか欲しくないかを特徴づけるのは、まず 1) 結婚意識（結婚したい）と思うか否かが大きな要素となる（最初の分枝）。すなわち、子どもが欲しいと思う群は「1」いずれ結婚するつもり」と回答、子どもが欲しくない群は「2」一生結婚するつもりはない」もしくは「3」考えたことがない」と回答している。さらに子どもが欲しいと思う群が、次に分枝する要素は「歩く」程度の身体活動を 6 ヶ月間以上続けていることである。横棒グラフの青は「子どもが欲しい」と回答した者、赤は「子どもは欲しくない」と回答した者の比率を示す。

n (%)	いずれ結婚するつもり	一生結婚するつもりはない	考えたことがない	計
子どもは欲しくない	38 (3.35)	31 (2.74)	71 (6.27)	140 (12.36)
子どもは欲しい	880 (75.90)	18 (0.71)	125 (11.03)	993 (87.64)
χ2 検定				p<0.0001

表1.「子どもが欲しい」と「結婚するつもり」のカイ 2 乗検定（高校生）

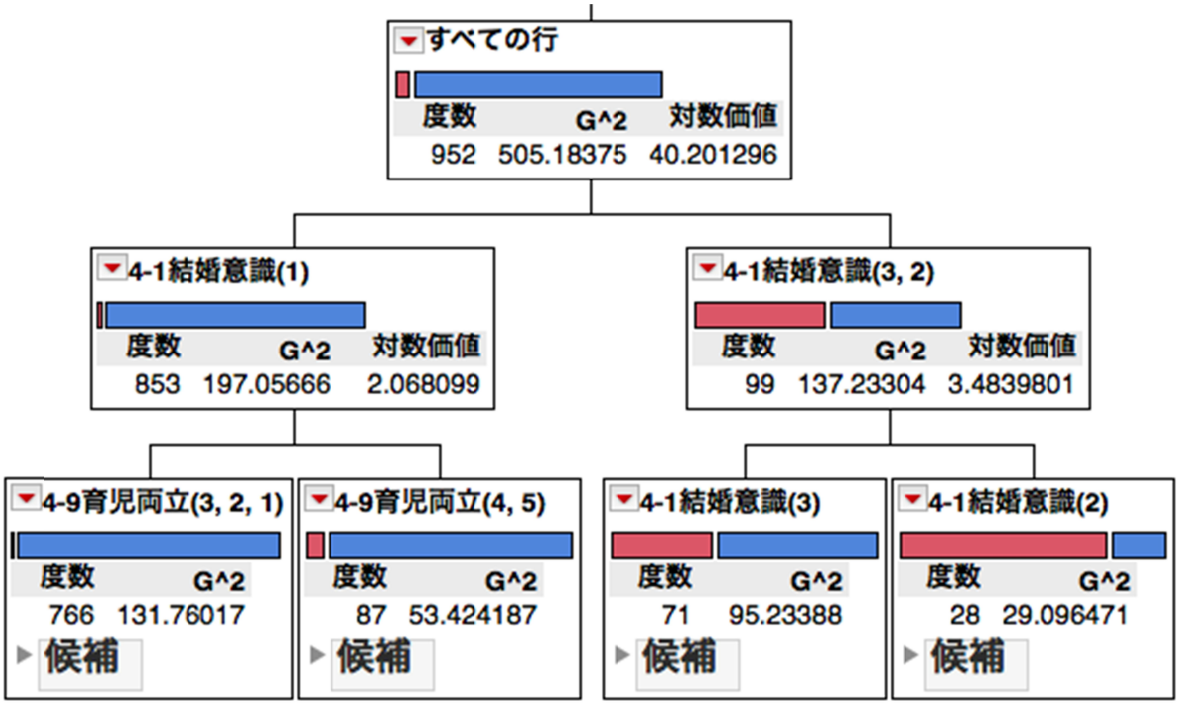

図 2 大学生の 1.子どもが欲しい、2.子どもは欲しくない、のカテゴリーで分枝させたパーティション解析

子どもが欲しいという群は、「1」いずれ結婚するつもり」と回答し、さらに仕事と育児の両立を望んでいる者たちである。一方、「子どもは欲しくない」と回答した群は、「2」一生結婚するつもりはない」と回答する者の割合が多かった。横棒グラフの青は「子どもが欲しい」と回答した者、赤は「子どもは欲しくない」と回答した者の比率を示す。

n (%)	いずれ結婚するつもり	一生結婚するつもりはない	考えたことがない	計
子どもは欲しくない	19 (2.02)	22 (2.34)	28 (298)	69 (7.34)
子どもは欲しい	822 (87.45)	6 (0.64)	43 (4.57)	871 (92.66)
χ2 検定				p<0.0001

表2.「子どもが欲しい」と「結婚するつもり」のカイ 2 乗検定（大学生）